



情報科学芸術大学院大学附属図書館

vol. 3

2016.3

IAMAS 図書館便り

IAMAS [イアマス] とは、情報科学芸術大学院大学の英語表記の頭文字を取った略称です。



特集 現代美術作家 安藤泰彦

→ 恐ろしい本 | 本による踏み迷い 薦める本? 思い出の本?

- 私のイチオシ - 学生が薦める本 -
- 館長コラム
- お知らせ

特集 現代美術作家 安藤泰彦 (あんどう やすひこ)



二匹の猫の横で寝る私

この特集では、IAMAS の教員に、自著・人生を変えた本・お薦めの本などを紹介してもらいます。

第3回は、前図書館長で図書館運営委員の安藤泰彦教授です。

→恐ろしい本 その1 一本による踏み迷い

本はとても恐ろしいものです。ふと気晴らしに手にした本が知らず知らずのうちにあなたを呑み込み、引き返すことのできないところまであなたを運んでしまうことはよくあることです。それは、小説のようにそこで語られている物語世界にどっぷりと入り込むということだけではありません。本当に怖いのは、表表紙と裏表紙の間で閉じているよう思われる一冊の本に無数の穴があいていて、そこから別の本へと誘いこまれることです。どのような本でも、一つ一つの小宇宙をかたちづくっているのですが、それらは無数の別の本と繋がることで、ある種パラレルワールドのような世界をかたちづくっています。一つの本の言葉と別の本の言葉が響きあい、まるで木霊のように、いつまでもその声が続いています。そもそも読者とは、その永遠の木霊 (echoes) の中に居合わせ、ついつい自分も声をあげてしまう者なのでしょう。

ギリシア神話の中に、エコーとナルシスの話があります。ナルシスはエコーの誘いを無視して、水面に映る自分の影に憧れ、最後には溺れ死にます。ナルシスのように、声ではなくイメージに身を任せるほうがきつと楽に死ぬるのでしょうか。可憐な水仙に蘇ることもできますし…。いつの頃からか、美術はナルシス的素振りでもエコーの声を避けるようになりました。視覚イメージから言葉を遠ざけることで、イメージの背後にある言葉の作用を忘れるかのよう。

振り返ってみれば、私 (たち) は、読者 (観客) の迷い込みを含めたこのような本のあり方自体をインスタレーションという形で作品化しようと考えていたのかもしれない。

【参考】 モーリス・ブランショ『文学空間』、『陥の文学』他
ジル・ドゥルーズ/フェリックス・ガタリ『カフカ マイナー文学のために』
オウイディウス『変身物語』(岩波文庫)



現代思潮新社/1962年



法政大学出版局/1978年

→恐ろしい本 その2 一薦める本?

学生に薦める本なんて…きつと読まないだろうし…、と思っていたのですが、これをきっかけに少し本の餌食になればいいかもと黒い思いで幾つかあげます。ミシェル・フーコーの「ヘテロトピア」という頁にしてわずか 20 頁ほどの小文があります。それは今から半世紀前、1966 年のラジオでの講演原稿です。とても美しく読みやすいテキストなのですが、そこから様々なイメージが湧き出してくる水源のようなテキストです。実際、あの一望監視装置 (パノプティコン) の引用で有名な彼自身の『監獄の誕生』(1975) へも、またドゥルーズ/デリダの『リゾーム』(1976) にも繋がっています。ただその水路を追わずとも、このテキスト自身から引き出すことのできるものは、多いように思われます。アートに関わる学生以外でも、公共空間における空間や時間の占有について興味のある人は一読したらどうでしょう。私は、たとえば、両親のダブルベッドが子どもの遊び場となるところがとても好きなくだりです。

ついでに、もう一つあげておきます。ジャック・ランシエールの『解放された観客』に補遺として加えられている「イメージの作業」。エステル・シャレフ=ゲルツの作品を論じている一文ですが、これもお薦めします。

【参考】 ミシェル・フーコー「ヘテロトピア」『ユートピア的身体/ヘテロトピア』
ジャック・ランシエール「イメージの作業」『解放された観客』



水声社/2013年



法政大学出版局/2013年

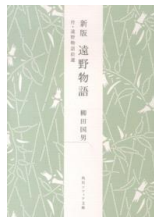
→恐ろしい本 その3 一思い出の本？

そういえば、思い出に残る読書体験がありました。思い出といってもこれは一種のトラウマに近いものです。正確には読書ではなく読み聞かせてもらったものです。小学三、四年のことでしょうか。それが最初で最後だったかと思いますが、何故か父親が弟と私にある短編を読んでくれたことがありました。確か就寝前のパジャマ姿で聞いていたはずです。その短編とは、(ああ、よりによって) エドガー・アラン・ポーの「黒猫」でした。強烈な読書(?)体験で、しばらくは暗い物陰に黒猫が潜んでいないか、壁の染みが人影に見えるような見えないような、そんな状態が続いていたのを覚えてます。もともとが勧善懲悪の物語なら、まだ「良い子」にしないで、などと対処のしようもあるのですが、これは違います。ふとしたきっかけから始まり、最後は妻を壁に塗り込んでしまうのですから。(こんな本を幼い子どもに聞かせてもいいのでしょうか?) けれど考えてみれば、かつて親や祖父母が子どもに聞かせてであろう昔話というも、柳田国男の「遠野物語」のように人間的な尺度では測れない非合理的な恐怖を孕んでいたのではないのでしょうか。それはともかく恐怖や不安は本から憑依するのでしょうか。本は恐ろしいですね。

【参考】 エドガー・アラン・ポー (1809-1849) 「黒猫」『ポオ小説全集 4』(創元推理文庫)
柳田国男『遠野物語 付・遠野物語拾遺』(角川ソフィア文庫)
花輪和一『みずほ草紙 1』『みずほ草紙 2』(ビッグコミックススペシャル)



東京創元社/1991年



角川書店/2004年

私のイチオシ ー学生が薦める本ー

本学の卒業間近の2年生にお薦めの本を紹介してもらいました。図書館で展示しますので、ぜひご利用ください。
(似顔絵: 丹羽彩乃さん)



浅羽昌二さん

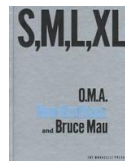
ルーズ・バレット『野性の知能-裸の脳から、身体・環境とのつながりへ』

記憶というのは脳に貯蔵されない、と言ったら信じられるだろうか。脳は身体の一部であり、身体は生息環境と分けることはできない。三位が一体となったところに「知」は宿る、と本書は主張する。プロセッサとメモリがどんどん高速・巨大化して世界を完全に分析・制御したら私たちに価値がある? と不安になったら、ハエトリグモや掃除ロボット・ルンバを観察し理解してみよう。(インターシフト/2013年)



Rem Koolhaas『S, M, L, XL』

例えば...こうしてみる。例えば対象の意味を問わず建築をサイズに還元し並べ書物にまとめてみる。例えば図書館が果たす機能とそれが所有する面積を図表にしてみる。例えば住宅の模型を反転してコンサートホールにしてみる。人は無意識に今までの延長にある一手を選択する。例えば...こうしてみる、という行為は、恐ろしく難しい。本書はレムによる、その最初の実践である。(Monacelli Press/1998年)



島影圭佑さん

ジョン・ヴァーリイ『汝、コンピューターの夢』

性別や生死の概念が変わってしまった世界を舞台にした SF 短編集。表題作は、記憶の移植や保存が可能な社会をテーマに、手違いでコンピュータの中に自分の意識を持ってしまった人が、認知や生死すら曖昧になった状態で正気を保つために抗う物語。世界の姿に倫理が揺らぎ、いつか訪れる特異点への想像と、それでも我々が失わない事柄への希望を自然と呼び起こす情緒的な一冊。(東京創元社/2015年)



古都唯希さん

館長コラム その3 書物は情報ではない

あいかわらず「速読のすすめ」や「多読の方法」といった類いの書物が店頭に並んでいる。そうした本を読んでいる時間があるならば実践したほうがいだろうと、いわゆる How to 本やマニュアル本の平積みを眺めていていつも思ってしまう。とくに、たくさん本を早く読む方法というものに、どんな利点があるのだろうかと考えないわけにはいかない。唯一の利点は、「本をたくさん読むことはいいことだ」という性善説ならぬ本善説が前提となっているということくらいだろう。いったい、生涯のうちに一万冊読んだ人のほうが千冊しか読まなかった人よりも幸福であったと言えるのだろうか。あるいは、一冊の本を15分で読む人が、一冊の本を何十年もかけて読む人よりも「できる人」であると言えるのだろうか。もちろん、一様に書物一般で捉えることは禁じなければならぬが、多読や速読を薦める人びとは、書物を情報と同義に考えているということは間違いないだろう。情報であれば量や速度は重要であろう。しかし、書物は情報ではない。いわば滋養のようなものであって、大食いや早食いはかえって毒なのである。ただし、情報以上に耽溺性が強いので中毒になることはうけあいが。



お知らせ

→「IAMAS 図書館長による大人のためのブックトーク」を開催

小林昌廣館長による「今週の一冊」拡大版を、2016年2月5日に岐阜県図書館で開催しました。館長が選んだ本は、耕治人『そうかもしれない』、九鬼周造『いきの構造』、石原真『AKB48、被災地へ行く』の3冊。参加者は館長の絶妙なブックトークに酔いしました。なお、このイベントは、岐阜県図書館新館開館20周年記念事業として企画され、当館が共催しました。



小林昌廣館長
岐阜県図書館にて

→図書館アンケート調査の結果

学生への図書館アンケート調査を2015年11～12月に実施しました。結果について、図書館の満足度は概ね90%と高いものの、他の図書館等から図書や論文のコピーが取り寄せられることを知っている学生が4割に達しないなど、図書サービス周知に課題があることがわかりました。また、充実してほしいテーマ・分野や購読してほしい雑誌なども挙げてもらいました。これらのご意見は、来年度購読の雑誌追加や図書の収集に反映させていただきます。期待しててください。

→資料展示 2015.12～2016.2

資料展示として、「図書館便り」紹介の本展示（12月～）、講師の高嶺格さんの資料などを集めたIAMAS2016資料展示（2月～）を開催しました。また、映画公開記念STAR WARS 関連資料展示（1月～2月）、追悼ウンベルト・エーコ著作展示（2月～）など話題となった映画や人物についても取り上げました。



IAMAS2016 資料展示

→卒業する2年生の皆さんへ

ご卒業おめでとうございます。私（寺井）も皆さんと同じ2014年4月にIAMASに来ました。同期（？）として皆さんを見送るのは寂しいですが、多方面でのご活躍を期待しております。なお、卒業後も登録すれば、図書館を引き続き利用することができます。ぜひ今後もご利用ください。